



安コシ★お宝さんぽみち



～地域にお住まいの安田勝寿さんのコレクションの中から、八戸ゆかりの逸品を紹介するコーナーです～



駄菓子屋の風景 昔の駄菓子屋さんと言えば、ブリキのガラスケースや木箱、瓶ガラスを思い出します。中には色とりどりのお菓子や、キャンディーが詰まっています。

子どもにとって、「食べる」とは、遊ぶことと同じくらい楽しいことです。また駄菓子屋が全盛を誇っていた昭和時代、店先には子どもが喜ぶような色とりどりのお菓子やおもちゃが、ぎっしりと並べられていました。
百田玉を大事に握って走っていた店内には、お菓子のおいしそうなお匂いが漂い、きらびやかなパッケージに胸を躍らせながら面白い物をしたものです。当てる物のクジを引くときのあやしいときめきと期待。特賞を引き当てたときの喜びは、子どもへの射幸心を満たしてくれました。私も子どもの頃母の実家に遊びに来た際に、小

学校前の泉山商店さんでよく買い物をしてきました。各地域の小売店が姿を消していく中で、泉山商店さんは今でも昔ながらの店構えで営業されている数少ないお店です。コンビニエンスストアが全盛の時代にあっても、昔ながらのゆったりとした雰囲気の中で、買い物ができる喜びに感謝したいものであります。

お菓子の歴史を語る上で、スナック菓子のカゴの存在を忘れてはなりません。現在四十年代から五十年代前半のお父さんたちが子どもの頃熱狂したのが、一九七二（昭和四十七）年にカゴルビーより発売された「仮面ライダーズスナック」です。当時二〇円売りのスナックのオマケとしてついたカードが爆発的人気を誇りました。その後の「プロ野球スナック」や平成時代の「ムシキングブーム」などに繋がっていきます。

私の個性は、駄菓子屋文化に育てられたと言っても過言ではありません。しかし、今では駄菓子屋が町からほとんど姿を消してしまいました。でも、子どもたちにとって魅力や必要がなくなったわけではありません。子どもが成長する過程で、その存在意義は今でも大きいと思います。



安田勝寿

経歴
 ・青森県立郷土館 協議会委員
 ・八戸ペンクラブ 理事

遠足だより

五月二日水は、子どもたちが待ちに待った遠足でした。

一・二年生は蟹沢水道公園へ、みんな列を守り一生懸命に歩いていました。公園に着いたときは、少し疲れた様子でした。三・四年生は風の道公園。ブランコや滑り台で楽しく遊んでいます。五・六年生はこどもの国で、バレーボールやサッカーなどを思いっきり楽しんでいました。

この日は天候にも恵まれ、子どもたちは勉強のことを忘れるかのよう



編集後記

☆☆☆

四月から小学校生活のスタートを切った一年生。勉強や集団行動、徒歩での通学などに、そろそろ慣れてきた頃ではないでしょうか。また、今年度から伊藤校長先生も町畑小学校で新たなスタートを切られました。今年は遠足や運動会など、全校行事では晴天に恵まれています。伊藤校長先生はもしかして「晴男」なのでは？と思っております。

あと十日ほどで夏休みがやってきます。子どもたちは楽しみにしています。宿題、工作、自由研究と、親にとっては（？）大変な時期がきたのではないのでしょうか。

(濱口)

